研修名　保健衛生・安全対策
令和元年１２月２０日（金）９：３０～１２：３０
講　演　「教育保育施設等における感染症対策と血液を介して感染する病気の防止」
講　師　大阪府済生会　中津病院　安井　良則　氏

1　講演要旨

1）施設内での主な感染経路

① 飛沫感染

・主な感染症
風疹、マイコプラズマ、インフルエンザ、流行性耳下腺炎、溶連菌、手足口病等

・保育士と園児が密着して過ごす保育現場では、絶対に防げない。

・子どもが感染している場合、職員も感染している可能性は大きい。
（「感染」＝「感染症」ではない。感染しても発病しないことはある。）

・３歳以上に多い。子ども同士が直接コミュニケーションを取るため。

◎咳エチケット

・手のひらで咳を受けとめたら、すぐに手を洗う。（接触感染に繋がる。）

・咳は肘の内側で受けとめる。

・咳が出るときは、できるだけマスクをする

② 空気感染

・主な感染症
麻疹、水疱瘡、結核　等

・空気感染の感染範囲は、その部屋全体に及ぶ。

・インフルエンザは空気感染しない。麻疹・風疹は短時間でも同じ空間で過ごすと、感染の恐れがある。

・空気清浄機は、意味が無い。（結核にのみ有効）
換気と発病者の隔離が基本。

③ 接触感染

・主な感染症
ヘルパンギーナ、咽頭結膜熱　等

・菌が皮膚を突き破って、体内に入ることはない。口や鼻、目などの粘膜にたどり着いて、感染する。

・消化器系の感染症の多くが、接触感染による。

・対策の基本は手洗い等の手指衛生。しっかりとした手洗いが行われていない接触感染対策はあり得ない。

・子どもの集団生活施設においては、まず職員の手洗いのレベルを向上・維持する。その上で子どもたちの手洗いのレベルを可能な限り上げることが重要。

・タオルの共有は絶対にしてはいけない。石けんは固形よりも液体、泡。
ペーパータオルの使用が理想的。
・０～３歳児に多い。保育士が媒介している。

④ 経口感染

・ロタウイルス、ノロウイルス、0-157、サルモネラ　等
・鶏肉の生肉は絶対にいけない。一部の肉に火が通っていなかった。抜いて給食に提供。→一部でも火が通っていなかったら、全ての提供をやめる。

２）手洗いについて

① 石けんについて

・固形石けんでは前に洗った者の汚れや病原微生物が付着している可能性がある。固形石けんよりも、液体石けん、液体石けんは泡石けんが良い。
・液体石けん液を詰め替える際、継ぎ足しはしてはいけない。1 回汚染されると、されっぱなしになる。残っている液体は破棄し、容器をよく洗って乾燥させてから新たに液を詰める。
・水洗いは論外。

② 設備について

・各クラスに手洗い場を設置。
・水洗は自動か、肘または膝によるレバー式。（トイレも同様）
・ペーパータオルの使用。
・布タオルは個人持ち。またそれぞれのタオルが触れ合わないようにかける。

③ 手洗い方法

・手首の上、出来れば肘まで石けんで洗う。
・年少児にも手洗いの介助は必要。
・手洗いの仕方の掲示。

３）様々な感染症について

① ノロウイルス

・今年は少ない。
・１０年に一度新型になって流行。
・０～４歳に流行しやすい。
・感染症が疑われる患者が直接触れた便座は、使用直後に塩素系の消毒剤で消毒する。（他、１日に２回以上消毒。）
・下痢や嘔吐物の処理は適切且つ即座に実行されなければいけない。（他児を遠ざけて、１人で行う。）

② RS ウイルス

・９月頃がピーク。０～２歳児に多い。乳幼児が入院する１番の要因。
・SIDS は、RS ウイルスの流行中に多い。
・乳幼児期において、非常に重要な疾患。乳児期早期においては、下気道の炎症（肺炎）を中心とした、重篤な症状を引き起こす。

・低出生体重児や心肺系の基礎疾患、免疫不全がある場合には重症化のリスクが高い。
・１万円/本の注射で予防も出来る。（月１回、保険適用内。）

③ 咽頭結膜熱（プール熱）
・春から夏にかけて流行しやすいが、１２月頃にも増える。
・咳エチケットが大切。
・塩素系の消毒が有効。
・２０１９年は、冬も夏ほど流行しやすいと予想されるため、注意が必要。

④ インフルエンザ
・小児の集団生活施設では有効な対策は難しい。ただし、流行を遅らせるために対策は必要。
・亜熱帯地域では、夏と冬、年に２回流行する。

⑤ ヒトメタニューモウイルス
・３～６歳に多い。
・熱は低い。登園まで１週間ほど欠席。

⑥ 麻疹
・昨年１１月頃から大阪で流行。
・発疹　顔・頭→体→四肢（首より上から始まるのが特徴。）
・一つ一つが独立せず、繋がっている。
・抗体検査、ワクチン接種をきちんとしておけば怖くない。

⑦ 風疹
・自分を守るため、妊婦を守るため、胎児を守るために抗体検査、予防接種を。
・顔→体幹に発疹。一つ一つが独立している。

⑧ 水痘
・２０１４年１０月より、水痘ワクチンが定期接種化。罹患率が減少した。
・水痘ウイルスへの曝露の減少は、全年齢的に帯状疱疹の罹患率が上昇していることの大きな要因。
・２０～４０代の罹患率が上昇。これは水痘に罹患した子どもからのウイルス曝露の減少を最も大きく受けている世代。
・２０２０年に帯状疱疹ワクチンが発売される予定。

２　感想

様々な感染症について、また感染経路について、学ぶことが出来ました。同時に保育施設での感染症対策の難しさも感じました。講演でも言われていたように、感染対策はもちろんですが、流行を遅らせるために、改めて自身の感染症対策を見直し、講演内容を他保育者や保護者にも知らせることで、日々の保育に活かしていきたいです。

（記録　南山城保育園　西端麻実）